

# 「山当て」による潟とその周辺集落の“鎮め”について

太田和宏 研究補助員／赤塚中学校地域教育コーディネーター

## 1. はじめに

パワースポットが数年前より全国的にブームとなり、社寺巡りが流行した。今日でもパワースポット人気が続いている。パワースポットを訪れる人々は、そのご利益を得たいと訪れているが、その力（利益の効力）はその場所が持つ1箇所から湧いていると考えられているようだ。しかし、パワースポットは、複数の箇所の合成でつくられている場合があることや、私たちの住む身近なところにも存在しているということは、あまり知られていない。そして、それらのパワースポットが何故そこに位置するのか、それもあまり知られていない。

明治時代に入る以前の日本は、「神仏習合」であった。社寺を同一に扱い信仰対象とした。自然環境のあらゆる物に神が宿るとされ、自然環境への信仰心が深かった。

ところが、明治時代に入ると神仏習合を禁止する「神仏分離令」が発令され、社寺混同だった関係が切り離されるようになった。そして今日、社寺はそれぞれ単体として分かれて存在している。

新潟市内にはどこもかしこも社寺があるが、これらと潟との関係性があるのだろうか。それを探る手がかりの一つとして「山当て」の手法を用いて、潟と人々がどう付き合おうとしていたのか、その一片を今回見て行きたい。

## 2. 「山当て」について

江戸時代までの都市計画に使用された手法として「山当て」が用いられた。その元となる思想は、中国からの「陰陽五行説（おんみょうごぎょうせつ）」（風水思想）である。

有名なものとしては「四神相応（しじんそうおう）」がある。四神相応の図としては図1がある。四神すなわち玄武（げんぶ、北）・朱雀（すざく、南）・青龍（せいりゅう、東）・白虎（びゃっこ、西）の四つで構成され、玄武に丘陵地、朱雀に湖沼、青龍に河川、白虎に街道を備えた土地は繁栄すると言われ、都市計画上理想的な場所とされた。平安京は、それまでの都であった長岡京や平城京とは大きくことなり、正に四神相応の地であった。平安京における四神は、玄武に船岡山、朱雀に巨椋池、青龍に鴨川、白虎に山陰道がある。

一方で、四神相応は当てはまる土地は極めて少なく、一般的に広く用いられたものとしては「鬼門（きもん）・裏鬼門（うらきもん）」と呼ばれる忌む方角を避ける方法である。鬼門（北東）・裏鬼門（南西）は、

「邪気（じゃき）」と呼ばれる魔物が入り込む方角とされ、特に鬼門は現在でも忌む方角として扱われている。邪気は直進する性質を持つとされ、鬼門・裏鬼門の直線軸に「鬼門封じ（鬼門除け）」が置かれた。

江戸時代以前の方角は干支が用いられた。鬼門は丑寅の方角（艮・ごん）、裏鬼門は未申の方角（坤・こん）となる。反対に南東を辰巳（巽・そん）、北西を戌亥（乾・けん）と呼ぶ。

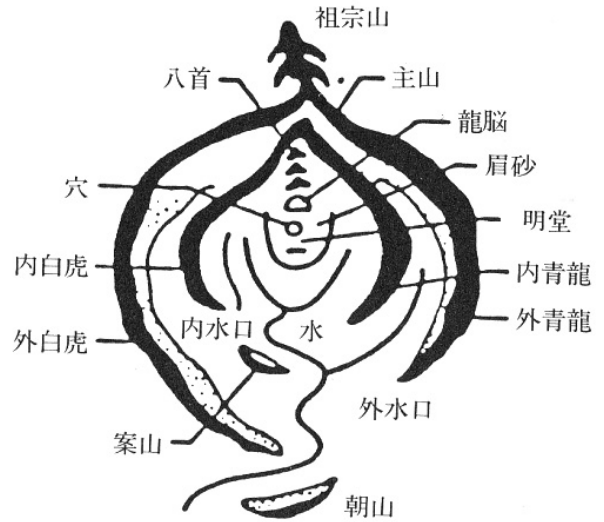


図1. 四神相応（理想的風水地形）<sup>1)</sup>

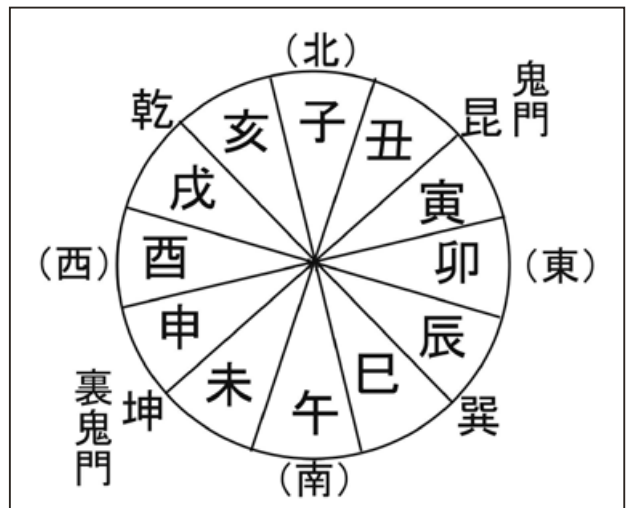


図2. 鬼門・裏鬼門の関係

鬼門・裏鬼門を忌む風水思想は、中国にはない日本独自のものであり、日本で一般的にも用いられる。現在に至っても住宅設計でも用いられることがあるほどである。

邪気は直進する性質上、それを避けると跳ね返る。跳ね返えるほど邪気は強くなるという性質があることされ、日本では古来より邪気が入り込む鬼門・裏鬼門の方角にはそれを防ぐための鬼門封じとして神社が置かれた。

本稿で取り上げる「山当て」は、当初は名前の通り山頂と山頂を結ぶ直線状に道路を配置するものであったが、平安時代から陰陽道が用いられるようになったことで、より複雑な計画方法に変化した。そこに日本独自の鬼門・裏鬼門の思想が加わり、より複雑な風水思想として「山当て」が生み出され、それに基づいて都市・集落計画された。

「山当て」で整備された都市・集落の道路には「辻

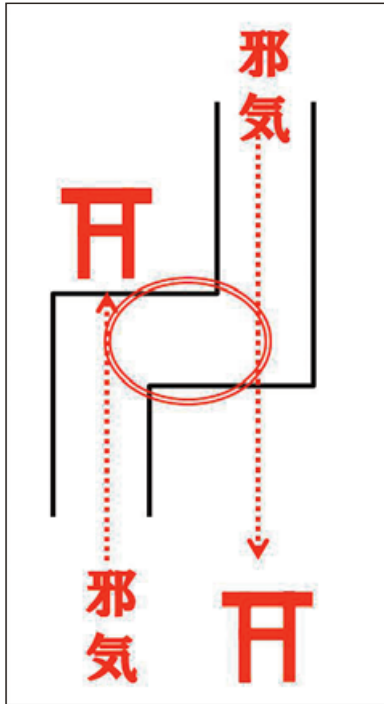


図3. 邪気の性質

(つじ)」が殆ど見受けられない。「辻」は、字の如く道路が十字に交差する十字路の事をいうが、「辻」の交差部は邪気が変わる最も忌み嫌う場であったためである。

図3は、直進する邪気の流れを社寺で吸収することで、丸で囲んだ領域に一切邪気を入れないようにするという仕組みの模式図である。丸で囲まれた領域には、都市や集落、官庁、城郭などが設けられる。

この道路を通る邪気を吸収させるために神社を計画的に配置させ、道路計画を行うものが「山当て」である。

図3のように、道路の延長線上に社寺を設けている集落の代表例として赤塚（新潟市西区）、弥彦が挙げられる。

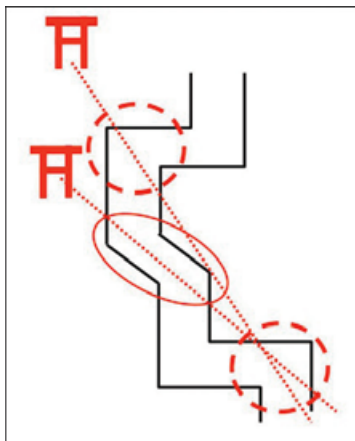


図4. 邪気の性質

図4は、図3をさらに複雑化させた場合の模式図である。この場合は道路を直進する邪気を曲がり角で抑え、

その延長線上に社寺を配置することで邪気を吸収するという概念である。この手法は江戸時代に広く用いられている。

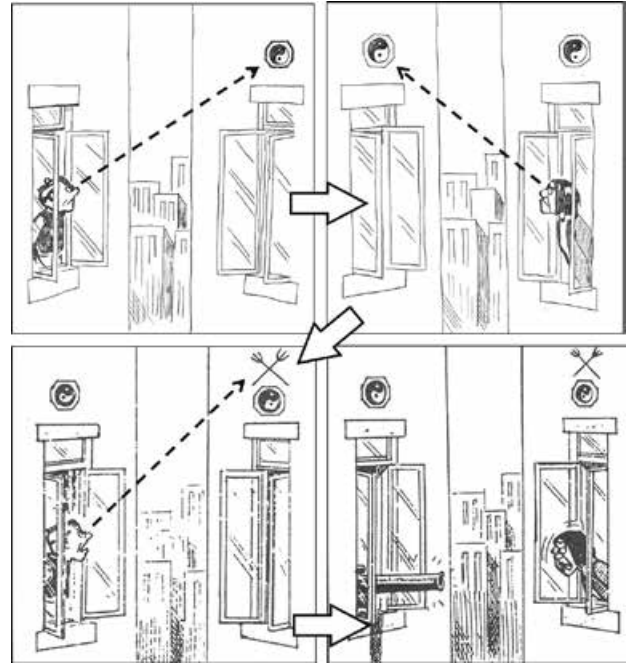


図5. 中国の風水思想<sup>2)</sup>

図5は、中国における風水思想を表現したイラストである。中国の風水思想上では、窓が向かい合っていることは良くないとされている。例えば、片方の家で窓の上に邪気を跳ね返す八卦鏡を掛けたとする。すると跳ね返った邪気が隣の家に入るので、それを防ぐために隣の家も八卦鏡を掛ける。その八卦鏡によって邪気が再び跳ね返って最初の家に入るので、さらに強力な魔除けを掛ける。魔除けの掛け合いになってきがないので、次は大砲をもって来るしかないというブラックジョークである。<sup>3)</sup>

一方で、日本の「山当て」は、邪気を吸収させるところに特徴があり、跳ね返って力を増すことはない。

## 2. 1. 鬼門・裏鬼門の事例

### 2. 1. 1. 京都御所

城郭や屋敷の全体計画には鬼門・裏鬼門を抑えることが重要であるとされていた。京都御所では、鬼門の方角に「猿ヶ辻」と呼ばれる場所を設置した(図6, 図7を参照)。京都御所は純粋な長方形ではなく、猿ヶ辻によって鬼門(北東)の塀が凹んでいる。敷地隅の角を切り、塀の底下に猿の木像が置かれており、さらに鬼門の方角を進むと下賀茂神社・比叡山延暦寺・日吉大社がある。これら一連の関係は「鬼門封じ」である。

このように、敷地の角を削って鬼門除けとするものは新潟市内においては旧笹川家住宅(南区味方)にある。



図6. 京都御所の「猿ヶ辻」



図7. 京都御所の「猿ヶ辻」にある猿の像

鬼門の方角に向けて猿の木像や鬼瓦を置き、桃やヒイラギなどを植えることで鬼門封じとしていた。これは、鬼門の方角すなわち丑寅（艮）の反対の方角が未申（坤）になるため、鬼門の反対側の動物を鬼門側に配置することで邪気が方角を勘違いし、入れさせないようにするものである（図2.を参照）。

京都御所の鬼門除けとして下賀茂神社があり、その延長線上に比叡山延暦寺がある。延暦寺の堂屋根にも鬼門除けとして猿の像が置かれている。

日本の昔話のひとつ「桃太郎」は、陰陽五行説（風水思想）にも関係している。桃太郎が鬼を退治するというものは鬼門の方角に桃の木を植える行為と同じで、桃の木を植えられない場合は鬼瓦に桃の絵を入れる。桃太郎の家来として猿・犬・鳥がいるが、これは鬼門の反対方向である未申の方角（坤）の干支が申・酉・戌であるからという説がある（図8.を参照）。

なお、日本の鬼のイメージは、小さな角が生え、虎柄の下着を身に着けたものであるが、鬼門の方角が丑・寅、すなわち丑は牛の角、寅は

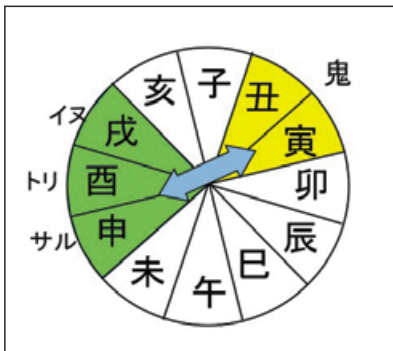


図8. 丑寅と申酉戌の方角の関係

虎柄の下着ということからである。

## 2.1.2. 江戸城と東照宮

江戸城と城下町を整備するにあたり、徳川家康は「山当て」を重視している。江戸城の鬼門封じとして東叡山寛永寺、裏鬼門に増上寺を配置している。

この時、「山当て」を指示したのは、徳川家康の指南役であった南光坊天海（なんこうぼうてんかい、1536?～1643年）である。徳川家康は、慶長8年（1603年）幕府を開くにあたりその地をどこにするか天海に助言を得て、江戸を選んだといわれている。天海は、前述のとおり「四神相応」の考えをもとに、江戸に幕府を開くことに適するとし、四神相応として北に富士山（実際は全く違う方向であるが、あえて北と見なした）、東に隅田川、西に東海道、南に江戸湾（東京湾）と当てはめた。

また、江戸城本丸の位置を選定する際も、富士山・秩父山系の力を集める「龍穴（りゅうけつ）」を江戸城の本丸に置き、本丸全体が現在で云うパワースポットとした。特に本丸内でも最も力が集中するのが天守台と旧中奥付近である。<sup>4)</sup>

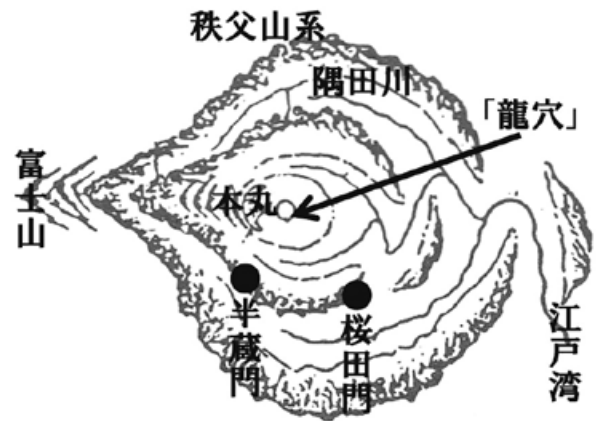


図9. 江戸の四神相応

徳川家康が死の直前、遺言で久能山に御堂を建てて位牌を三河国大樹寺に、一周忌の後に日光山へ神として祀るようにと残している。久能山東照宮は西の方角に向いて建てられているが、これは西国京都にある豊国神社（豊臣秀吉を祀る神社）からの霊力を抑えるためである。その久能山東照宮と豊国神社を結ぶ直線内には、三河国鳳来山東照宮と大樹寺が位置している。つまり、大樹寺と三河国鳳来山東照宮・久能山東照宮の3つの力で豊国神社を抑えていることになる。<sup>5)</sup>

また、久能山東照宮と日光東照宮を結ぶ直線内には富士山と世良田東照宮がある。富士山は平安時代より、「不死山」と呼ばれるように、縁起の良い山として信仰され、大きな力（霊力）を有するとされた。

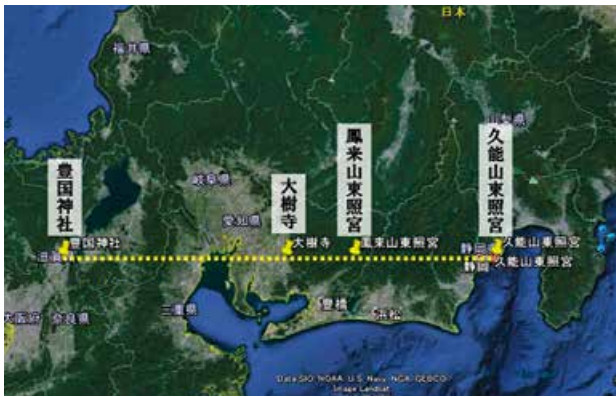


図10. 豊国神社と東照宮(地図= Google earthより)

日光東照宮は、陽明門（ようめいもん）の真上に北極星が位置し、宇宙を意味するものというのは一般的にも良く知られている。その宇宙の力を真南の江戸に送るといふことと、富士山からの不死の力を一緒に送る役割を日光東照宮は担っている（図11.を参照）。<sup>6)</sup>

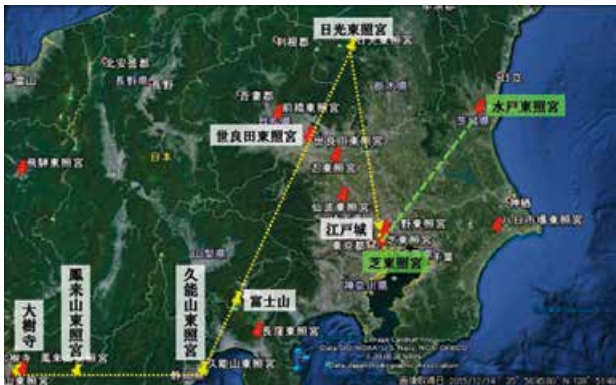


図11. 東照宮と富士山(地図= Google earthより)

江戸城の鬼門封じとしては、大手門を中心点として、上野に東日本の比叡山ということで東叡山寛永寺を配置し、裏鬼門に芝増上寺を配置している（図12.を参照）。

このほか、あまり紹介されないが、江戸城の鬼門の方向に水戸東照宮が置かれ、裏鬼門に芝東照宮が置かれている（図11.を参照）。

徳川家康は、徳川御三家（尾張，駿府，水戸）を置き、徳川宗家の跡継ぎが途絶えた時に御三家から将軍として迎えるとした。その優先順位は尾張（名古屋）・駿府（のちに紀伊へ）・水戸の順である。そのうち、水戸家は徳川宗家の目付として、尾張・駿府より格下の扱いはである。

徳川家康の遺言に「水戸から将軍後継者を迎えることになった時、徳川の時世は終わる」と言い残した。奇しくもその遺言通り水戸から徳川慶喜を15代将軍として迎えたのち大政奉還で徳川時代を終えている。

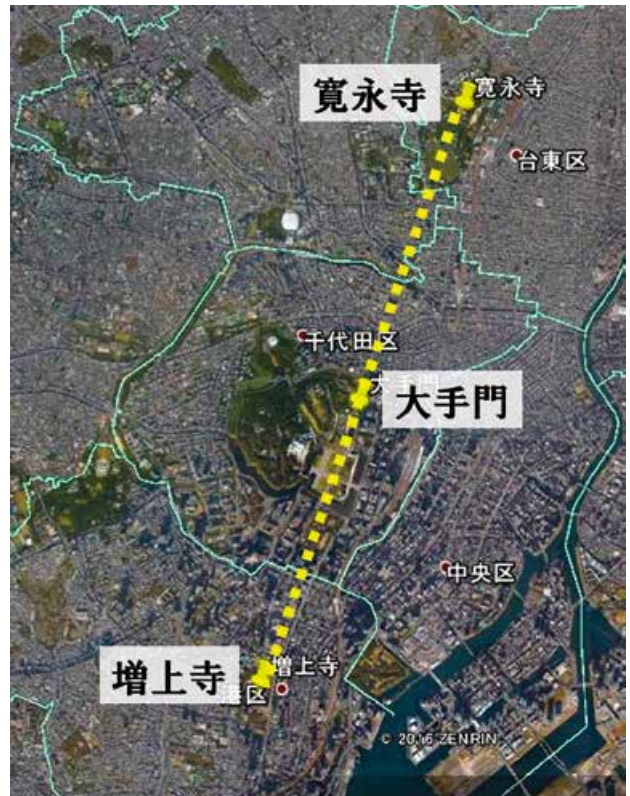


図12. 江戸城の鬼門封じ(地図= Google earthより)

### 2. 1. 3. 城郭・城下町の事例

江戸時代の城郭および城下町の整備では、城郭を中心点に置いて「山当て」による計画的な城下町整備が行われ、城郭の鬼門封じも置かれていた。

「山当て」は、四神相応のように地形に左右される都市計画ではなく、社寺を意図的に配置することで自由に都市計画を行うことができた。

城下町や集落の主要道路の一部に鍵型状の「枅形」・「食違い」と呼ばれる屈曲部分を配置している。

城門の屈曲である「枅形」・「食違い」は有事の際に敵の直進を防ぎ枅形の中で殲滅するための構造である。集落内にある枅形・食違いといった屈曲もこうした有事のための機能も果たす。こうしたことについては、ガイド案内やパンフレット、報道などで一般的に広く周知されている。

しかし、それよりもっとも重要なのが、邪気を払う“鎮め（しずめ）”である。

屈曲でもって邪気を「山当て」によって社寺の力を使って鎮めているのである。そして、各々の屈曲は直線状で関係性を持ち、邪気を吸収するという意味を持っている。邪気を吸収させなければ、跳ね返ってより強力となる。また、「山当て」をせずに邪気を入り込ませると、その土地は“凶”となって様々な災いが起こるとされていた。従って、「山当て」は単なる道路・都市計画のための手段ではなく、その土地を風水思想上理想的な土地にするためにも重要なものである。しかし、残念なこ

とに、外敵の侵入を防ぐためという事柄だけが独り歩きしている状態で、その場所に屈曲を設ける意味といった視点については認識が薄いのが現状である。

こうした城下町や集落内の屈曲である「枅形」・「食違い」が設けられている位置は、全て「山当て」によって導かれているのである。



図13. 城下町の「山当て」の事例 (村上城の場合)

図13のうち、丸で囲んだ神社は「山当て」に関係するもので、その延長線上に道路や屈曲部・城門が設けられている。特に、黄色で色づけした道路は「山当て」によってその形状が決められていることが良く分かる部分である。

さて、「山当て」の事例についてはこれくらいとして、新潟市内の潟とその周辺地域の「山当て」はどうなっているのか、筆者が独自に「山当て」の技法を用いてそれぞれの潟とその周辺集落との関係性について解析してみたので、それについて以下述べることにする。

### 3. 福島潟周辺について

福島潟は、新潟県内で最も広い潟であった。その周囲に位置する集落も多く、山側から多くの河川が福島潟に入り込んでいる。

福島潟の干拓は、江戸時代中期より行われる。これは徳川8代将軍・徳川吉宗が、享保7(1722)年に新田開発を奨励した高札を立てたことから、全国各地一斉に新田開発が行われるようになった、その一例である。

当時、新田開発者には開発して完成した分は開発者の所有と認められていた。

しかし、庶民個々での開発には限界があり、結果的には地主や藩など資金的に余裕があるところが行っていた。それによって、新潟県内では戦国時代に武家であった家柄が越後へ移住し帰農して新田を開きそれが大地主として成長、江戸中期にこの奨励で本格的に新田開発へ着手し益々所有地を広げ、全国的に有数の千町歩地主である「豪農(ごうのう)」を生み出すこととなった。

「豪農」と呼ばれる大地主は、開墾した土地を貸出し

て資金を経て、農家から事業者へと転身する家が多くなる。福島潟周辺の豪農を代表する家では、天王の市島家と、水原の市島次郎吉家、蓮野の二宮家などが挙げられる。こうした豪農が点在するのは、点在する多くの潟を干拓していったためであり、越後国の特徴の一つといえる。

福島潟とその周辺集落との「山当て」の関係については3.2.で述べるが、まず福島潟の伝説について見ておこう。

#### 3.1. 福島潟の人魚伝説

福島潟の伝説の一つとして、人魚伝説『海出人之図(越後国福島潟)』<sup>7)</sup>がある。まず、記された文献の内容を以下に紹介したい。

嘉永二酉年閏四月中旬

越後国福島潟人魚之事

越後国蒲原郡新発田城下の脇二、福島潟と云大沼有之、いつの頃よりか夜な、女の声にして人を呼ける処、誰有て是を見届る者無之、然ルニ或夜、柴田忠三郎といへる侍、是を見届ケ、如何成ものぞと問詰けるに、あたりへ光明を見放ちて、我は此水底に住者也、当年より五ヶ年之間、何国ともなく豊年也、且十一月頃より流行病ニて、人六分通り死す、され共我形を見る者又ハ画を伝へ見るものハ、其憂ひを免るべし、早々世上に告知らしむべしと言捨つ、又水中に入にけり

人魚を喰へば長寿を保つべし

見てさへ死する気遣ひはなし

右絵図を六月頃、専ら町中を売歩行也



図14.『海出人之図(越後国福島潟)』による<sup>8)</sup>

この史料には、「福島潟にいつ頃からか夜になると人を呼ぶ女性の声が聞こえたが、誰もその姿を見た人はいなかった。ある日の夜、柴田忠三郎という武士がこの女性の姿を見届け、その女性の素性を聞くと、光を放ちながら“私は湖底に住む者である。当年より5年間は何

事もなく豊作であるが、11月頃より流行り病で6%の人が亡くなる。されども、私の姿を見た人あるいは姿を絵にしたのを見た人はその難を免れる。早速、世の中に告知せよ”と言い捨てて、再び水の中へ姿を消した。柴田忠三郎は、人魚の絵を描いた物を街中に売り歩いた」という内容である。

同じような、人魚が豊作や疫病を予言する伝説「予言獣」は、肥後国平戸にもある。これらは、人々へ不安を煽って人魚の擦絵を売り歩いて儲けようとした商売である。この挿絵が出回ったのは嘉永年間（1848～1858

年）と思われる。

### 3. 2. 福島潟周辺の山当て

前述したように、平安京遷都から始まり江戸幕府の治世の間広く使われてきた、日本独自の風水思想「山当て」の技法を用い福島潟とその周辺集落との関係性について筆者独自に調査した。このエリアで最も注目すべき神社についても紹介するとともに、それらの神社と福島潟が関係を持っていることを「山当て」によって明らかとする。

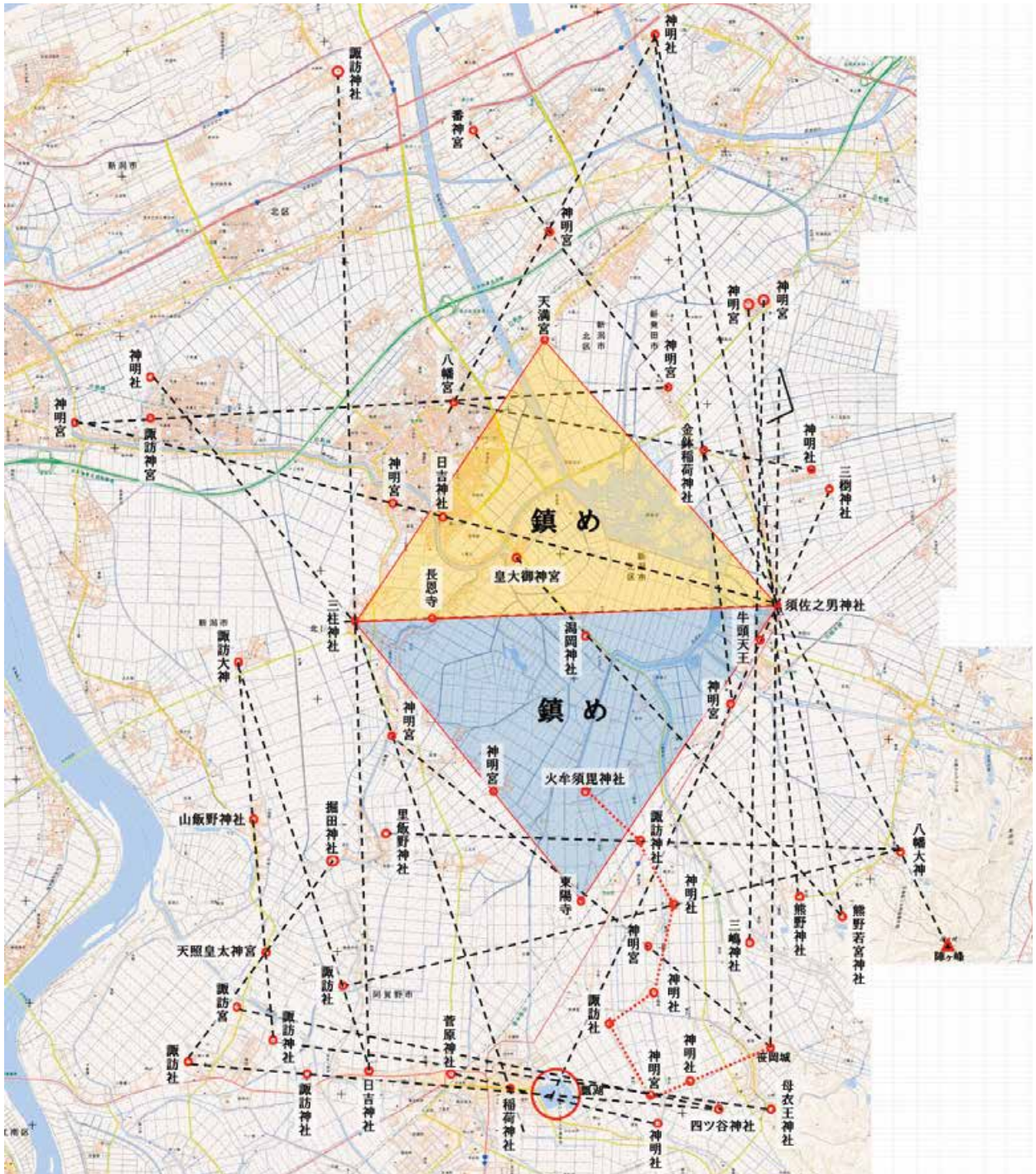


図 15. 福島潟周辺の「山当て」

### 3.2.1. 須佐之男神社

福島潟とその周辺集落の「山当て」にとって最も重要な神社が、新発田市天王地区にある須佐之男神社（すさのおじんじゃ）である。

祭神は須佐之男尊（スサノオノミコト、素戔鳴尊）である。創立時期は不明であるが、貞享3（1686）年に社殿を建て、牛頭天王（ごずてんのう）を祀ったと伝えられている。現在の社殿は天保14（1843）年の改築という。

明治23（1890）年、境内の裏に県道（現国道460号）が開通した際に、天王地区に住む画人・高橋耕雲の発願により、氏子総意のもと旧社殿の背面に新たに縁結びの故事にちなむ櫛名田姫を祀った。この神社は、背中合わせに社殿が連なる極めて珍しい様式となっている。



図 16. 天王神社（左）と須佐之男神社（右）

明治43（1910）年に字砂山（天王小学校）の金刀比羅神社（祭神は大物主命）を合併、須佐之男神社と改めた。『神社明細帳』によると、合併前の金刀比羅神社には境内社・潟岡神社（祭神は埴安姫命・水波賣命）があった。

高橋耕雲は天保元（1830）年、水原生まれの画人である。耕雲は高橋甚内の子で、名を長（長太郎）、生家は代々紺屋（染物屋）を営んでいた。水原の温古堂で学び、絵を描くことを好み、同郷の画人鶴田周岱（うだしゅうたい）から絵を学んだ。後に西蒲原郡地藏堂（現・燕市地藏堂）の南画家、富取芳齋に就いて修業して、伝統絵画の改造、革新を模索していた在京の画人であった緒家とも交わり、新しい画法を研究し技術を磨く。

明治10（1877）年頃、北蒲原郡天王新田（現・新発田市天王）に転居、明治17（1884）年、当時最高権威とされていた官営の展覧会「第二回内国絵画共進会」（東京上野公園内で4～5月に開催）に出品するなど活躍している。

この神社の祭神である須佐之男尊は、日本神話に登場する神である。『日本書紀』では素戔男尊、素戔鳴尊等、『古事記』では建速須佐之男命（たけはやすさのお

のみこと、たてはやすさのおのみこと）、須佐乃袁尊、『出雲国風土記』では神須佐能袁命（かむすさのおのみこと）、須佐能乎命などと表記される。

『古事記』の記述によれば、神産みにおいて伊弉諾尊（伊邪那岐命・いざなぎ）が黄泉の国から帰還し、日向の橘の小戸の阿波岐原で禊を行った際、鼻を濯いだ時に産まれたとされる。

建速須佐之男命は、櫛名田比売（くしなだひめ）の姿形を歯の多い櫛に変えて髪に挿し、八俣遠呂智（やまたのおろち）を退治する。そして八俣遠呂智の尾から出てきた草那芸之大刀（くさなぎのたち、紀・草薙剣）を天照御大神（あまてらすおのみかみ）に献上し、それが古代天皇の権威たる三種の神器の一つとなる（現在は、愛知県名古屋市の熱田神宮の御神体となっている）。

その後、櫛から元に戻した櫛名田比売を妻として、出雲の根之堅洲国にある須賀（すが）の地（中国・山陰地方にある島根県安来市）へ行きそこに留まった。

牛頭天王・須佐之男に対する神仏習合の信仰として「祇園信仰（ぎおんしんこう）」がある。

祇園信仰は、明治の神仏分離以降、須佐之男を祭神とする信仰となった（京都の八坂神社もしくは兵庫県の広峯神社を総本社とする）。



図 17. 須佐之男神社

牛頭天王は、元々は仏教的な陰陽道の神で、一般的には祇園精舎の守護神とされる。中国で道教の影響を受け、日本ではさらに神道の神であるスサノオと習合した。

これは牛頭天王も須佐之男も行疫神（ぎょうやくじん）とされていたためである。本地仏は薬師如来とされた。平安時代に成立した御霊信仰を背景に、行疫神を慰め和ませることで疫病を防ごうとしたのが祇園信仰の原形となる。その祭礼を「祇園御霊会（御霊会）」と呼び、10世紀後半に京の庶民によって祇園社（現在の八坂神社）で行われるようになった。

祇園御霊会は天延3（975）年には朝廷の奉幣を受け

る祭となった。この祭が後の祇園祭となる。

山車や山鉾は行疫神を楽しませるための出し物であり、また行疫神の厄を分散させるという意味もある。

中世までには祇園信仰が全国に広まり、牛頭天王を祀る祇園社・牛頭天王社が造られ、祭列として御霊会（あるいは天王祭）行われるようになった。



図 18. 天王神社

図15.にあるように、須佐之男神社（旧牛頭天王）は福島潟周辺の「鎮め」として最も重要な地点であることが「山当て」によって判明した。

すなわち、この須佐之男神社（旧牛頭天王）が持つ「行疫神（疫病をはやらせる神）」としての力を鎮め、福島潟周辺の集落へと鎮めとしてその力を広げるものである。前述の『海出人之図（越後国福島潟）』も、疫病が共通のキーワードとして挙げられる。

一方で、行疫神でありながら、牛頭天王は「茅の輪を作って赤絹の房を下げ、『蘇民将来之子孫なり』との護符を付ければ末代までも災難を逃れることができる」と除災の法を教示し、「鎮め」の方法を示している。

こうした須佐之男尊（牛頭天王）と草那芸之大刀は、最強の霊力を有するとされており、その力であらゆる邪気を鎮める。

当地においては福島潟周辺の鎮めを行うために建立されたものと思われる。

なお、この須佐之男神社（旧牛頭天王）は、天王地区にある大地主「市島邸」こと市島家の鬼門除けともなっており、市島家が繁栄したのも、この須佐之男神社（旧牛頭天王）によって鬼門からの邪気を防ぎ守られていたためともいえるのではないだろうか。

その須佐之男神社に「山当て」の技法を用いたところ、以下の社寺を直線で結ぶ線が見えてきた（これらの直線関係については図19.を参照。）。

- ① 金鉢の金鉢稻荷神社、滝沢の八幡大神、陣ヶ峰山頂

- ② 三ツ樹の三樹神社、中ノ通の牛頭天王、中ノ通の神明宮
- ③ 笹岡城の北の守り
- ④ 下興野の神明宮、熊堂の熊野神社
- ⑤ 蓮野の神明社、村岡の熊野若宮神社
- ⑥ 松潟の神明宮・川西の神明宮・嘉山の日吉神社

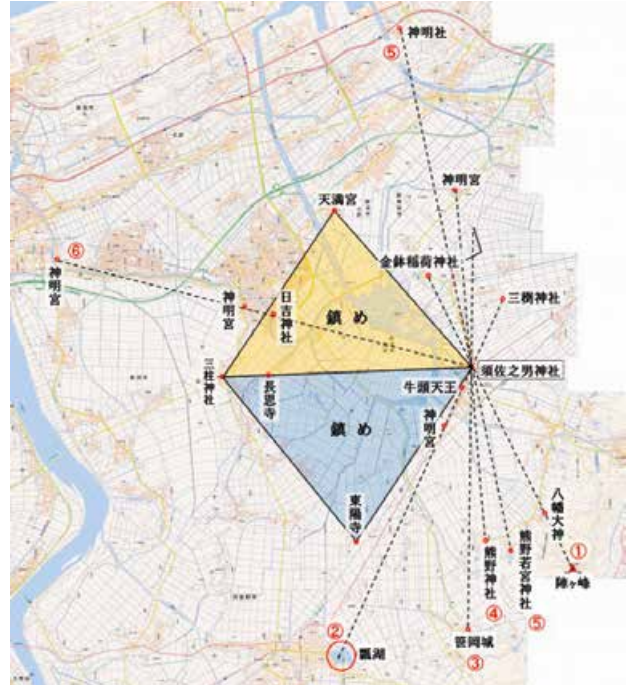


図 19. 須佐之男神社と「山当て」関係にある社寺

この内、③の須佐之男神社の力を北の守りとして利用するのが笹岡城である。笹岡城の北西を戌亥（乾）の方角には、島田の神明宮、長場の神明宮が位置する。

また、長戸の三柱神社・須佐之男神社・荻島の東陽寺を結ぶ三角形は「鎮め（しずめ）」の形を成し、その三角形を反転させた三角形の頂点に棕（むくろじ）の天満宮に重なる。

この長戸の三柱神社・須佐之男神社・荻島の東陽寺・棕の天満宮を角とする平行四辺形の中に福島潟が包み込まれており、須佐之男神社の力を各方面へ広げて福島潟とその周辺集落を鎮めている。

そして、②のラインの延長線上に水原の瓢湖（ひょうこ）があり、瓢湖に対しても須佐之男神社の力を与えて鎮めている。

須佐之男神社の持つ行疫神としての力を、福島潟とその周辺集落へと広めることで、水害が発生することが多いツツガムシによる疫病（当時は邪気として恐れられた）を抑える役割を果たしていると思われる。

### 3. 2. 2. 三柱神社

須佐之男神社に次いで、福島潟とその周辺集落の「山当て」で重要なのが、三柱神社（みつはしらじんじゃ）である。この神社は、長戸呂新田村（北区長戸）に鎮座



する。もとは諏訪神社であり、『神社明細帳』（明治16（1883）年）に「無格社・諏訪神社」とある。

祭神は健御名方命で長戸呂新田の一部の産土神であった。昭和3（1928）年に神明宮（天照大神）と日枝神社（大山咋命）を合併し、現社号に改めた。



図 20. 三柱神社

この三柱神社についても「山当て」から、この神社に交わる直線として以下の神社を結ぶ線が見えてきた（図 21.を参照）。

- ① 三柱神社、長場の神明宮、水原の稲荷神社
- ② 松潟の神明社、三柱神社、大月の神明宮、荻島の東陽寺
- ③ 白勢町の諏訪神社、三柱神社、山口の日吉神社



図 21. 三柱神社と「山当て」関係にある社寺

この3本のラインが三柱神社で交わっている。そこに東からの須佐之男神社の力が加わり、須佐之男神社に次ぐ重要な神社として位置づけられていることが「山当て」によって判明した。この6本のラインはいずれも、3ヶ所の神社が直線状に交わる「三点一直線」である。

以上、図15.を見ると各々の神社の配置は計画的に行われていることが分かる。

これらは筆者独自の「山当て」による解析であるが、いずれもその周辺集落到に住む人々が福島潟とその他の自然環境と付き合うために、「山当て」によって邪気を払い、安心した生活を営めるようにと願いながら集落を形成していったことの証しではないかと考える。

### 3. 2. 3. 笹岡城

室町時代初期に越後国守護大名の越後上杉家が、揚北（あがきた）への備えとして一族を白河荘に置き、それが山浦上杉家となった。その山浦上杉家の居城が笹岡城である。

信濃国の村上義清が、武田信玄に領地を追われ、上杉謙信を頼った。謙信は、義清の子である国清を笹岡城の城主にして山浦姓を与えて上杉家の一門扱いとした。

笹岡城は、「新発田重家の乱」の際、上杉景勝方の前線拠点となった。その後は、番城として独立性の高い揚北衆の監視のために使われた。



図 22. 笹岡城と「山当て」関係にある社寺

図22のうち、眼を引くのが北斗七星である。北斗七星は、陰陽五行説において用いられるもので、貧浪星・巨門星・禄存星・文曲星・廉貞星・武曲星・破軍星から構成されている。

この構成を図22に当てはめると、四ツ谷神社（貧浪星）・神明宮（巨門星）・諏訪社（禄存星）・神明宮（文曲星）・神明社（廉貞星）・諏訪神社（武曲星）・火牟須毘神社（破軍星）となる。

これら北斗七星は、笹岡城の守りの役割を担っている。そして、北の守りとして天王の須佐之男神社を当てている。

#### 4. 鳥屋野潟周辺について

##### 4.1. 鳥屋野潟周辺の伝説

福島潟に続いて、鳥屋野潟とその周辺集落との「山当て」の関係については4.3.で述べるが、まず鳥屋野潟周辺の伝説について見ておこう。

##### 4.1.1. 鶺鴒ノ子の主

鶺鴒ノ子にある池には大蛇が住んでいた。ある時、この大蛇が会津の猪苗代湖の主のイモリと対決することになり、会津に向かったが、戦いに負けてしまい、鶺鴒ノ子の潟に主がいなくなった。この潟には川鶺鴒の子が多く集まったという。<sup>9)</sup>

##### 4.1.2. 松山の稚児池

大江山地区にも昔は各地に潟や池があった。稚児池はかつて稚児がこの池に落ちて亡くなったことからこの名があるという。<sup>10)</sup>

『越後輿地全図』には「児池」と記されている。

##### 4.1.3. 潟田の弁天さま

大江山・松山の西に広がる田の中に、老松に囲まれて弁天さまを祀るお宮がある。江戸初期頃に阿賀野川の土手が切れて大洪水となったとき、ここに潟ができ、弁天さまを潟のほとりに祀ったものという。<sup>11)</sup>

##### 4.1.4. 鳥屋野潟の主

鳥屋野潟は昔大潟と呼ばれ、その西側には小潟があった。鳥屋野潟の主は4メートルもする大鯉であったとも、大きな貝であったとも伝えられる。その他、カワウソやカッパの伝説もある。<sup>12)</sup>

##### 4.1.5. 三平池（女池）の大亀

女池は昔「三平池」と呼ばれ、女池に連なるように男池があった。三平池の主は八畳もある大亀であったとされる。昼間に三平池を舟で通ると、亀が動いて池の水を濁らせ、池の真ん中の思わぬところに突然亀の島ができ、その亀に舟を乗り上げた者もいた。

毎年春と秋に澄んだ湖水が赤く濁って泥海と化すことがあった。人々は「亀が池の掃除をしている」といった。この池で魚を捕る時は、岸から網を引くことはできたが、舟で池の中心部へ行って網を入れると必ず網が破られた。

昭和に入っても、子どもたちは三平池で水浴びをしたものであるが、近くの人たちが泳ぎ場を造ることとなり、せっかく土を盛っても翌朝には土が池の中に崩れてしまった。「ほうら、亀が怒っているぞ」といわれた。

三平池は女池村の共有地となり、昭和25（1950）年の耕地整理の際、池に橋を架けることができた。

池を埋める時は、僧侶に祈祷をしてもらい干拓が行われたが、この時には大亀はもはやいなくなっていたという。<sup>13)</sup>

##### 4.1.6. 下所の池

現在は幸西と町名が変わっている下所島には、昔池があった。昭和11（1936）年、新潟市に鉄道省新潟鉄道局ができる際、ここに宿舍建設地を造成することとなった。この池にも主が住んでいた。ある夜、近くに住む老婆の夢知らせで「長いこと厄介になったろも、ここにはいれなくなって、これから鳥屋野潟へ行くすけ逢いたくなったら鳥屋野潟へ来てくれや」と告げた。老婆がある日鳥屋野潟へ行き、持っていた肉を水面に投げると、胴が3尺もある大蛇が姿を現して肉をくわえ、水中に潜っていったという。下所島の池は信濃川から次々と砂を揚げて埋め立てられた。<sup>14)</sup>

##### 4.1.7. 新池の主

大洪水があると川の流れも変わるが、思いがけない所に池ができることもあった。こうしてできた池は次の大洪水で消えてしまうこともある。

楚川の新池もこうした川の氾濫によってできた。昭和初期までは、子どもたちはこの池で泳いだというが、度重なる出水で流れ込んだ土砂によって埋まってしまった。池ができたのはかなり古い時代のように、この池にも大蛇が住んでいて「この池に悪さをするとたたりがある」といわれたものであった。「そんなことがあるものか」といって網を入れ魚を捕った者が高熱を発して苦しんだり、その晩のうちに亡くなった者もいたと伝えられている。信濃川へ漁に出る者は、ここへ来て池の主を拜んでから出掛けたもので、池の水の色で漁の成否が分かったという。

昔、信濃川は天野を挟むように分かれ、下流でまた合わさるように流れていたが、明治23（1890）年に、天野の上手の川が分かれる舞潟付近で一方を締め切り、流れを現在の本流一本にした。そのとき“チンショ”（川が深くなって淵になり土手の決壊を防ぐために石で護岸をした所、沈床のことか？）と呼ばれる所で寝そべって

た一人の漁師の夢枕に「おれはここにいられなくなったすけ佐潟へ引越すぞ」といって佐潟へ移ってしまったと伝えられている。<sup>15)</sup>

#### 4. 2. 鳥屋野潟周辺の集落

鳥屋野潟周辺の集落は、新砂丘Ⅱ（砂丘列）に沿って形成される砂堤（砂丘の高み）に列状村を形成し、両側にある後背湿地は、到底人が住める環境ではなかった。後背湿地は主に水田として利用され、砂堤の中心軸に「かいろ」と呼ばれる主要道を設けた。この「かいろ」は、「開路＝開いた路（みち）」から来ていると思われる。「開道（かいどう）」と呼ぶ地区もある。

女池地区にある女池（三平池）と男池は、この「かいろ」のすぐ脇にあった。特に女池（三平池）の脇を通る「かいろ」は、大きく弧を描いて通っていた（図23.を参照）。

鳥屋野潟周辺の各地区にある神社の配置を見ると、ほぼ砂堤上や自然堤防上にあることが分かる。これは、必然的に人が住める環境が限られているためであり、それ以外の後背湿地帯に神社が置かれているところは存在しない。

砂堤や自然堤防に集落を形成したのにはメリットがあった。大雨によって後背湿地が水没しても、集落のところには水は辛うじて上がることはなかった。

時に信濃川や阿賀野川が破堤して集落が浸っても、周囲より早く水が引ける。後背湿地には水田が広がり、縦横無尽に水路が設けられていたことで舟運も可能であった。昭和30年代までは鳥屋野潟周辺・新潟駅南側にかけては、住居があるのは砂堤の上だけでその他は後背湿地にある水田地帯であった。それがその後、住宅地・商業地区として整備され現在に至っている。唯一、かつての地形の名残を伺わせるのは「かいろ」程度であろう。



図 23. 「かいろ」の位置（地図＝ Google より）

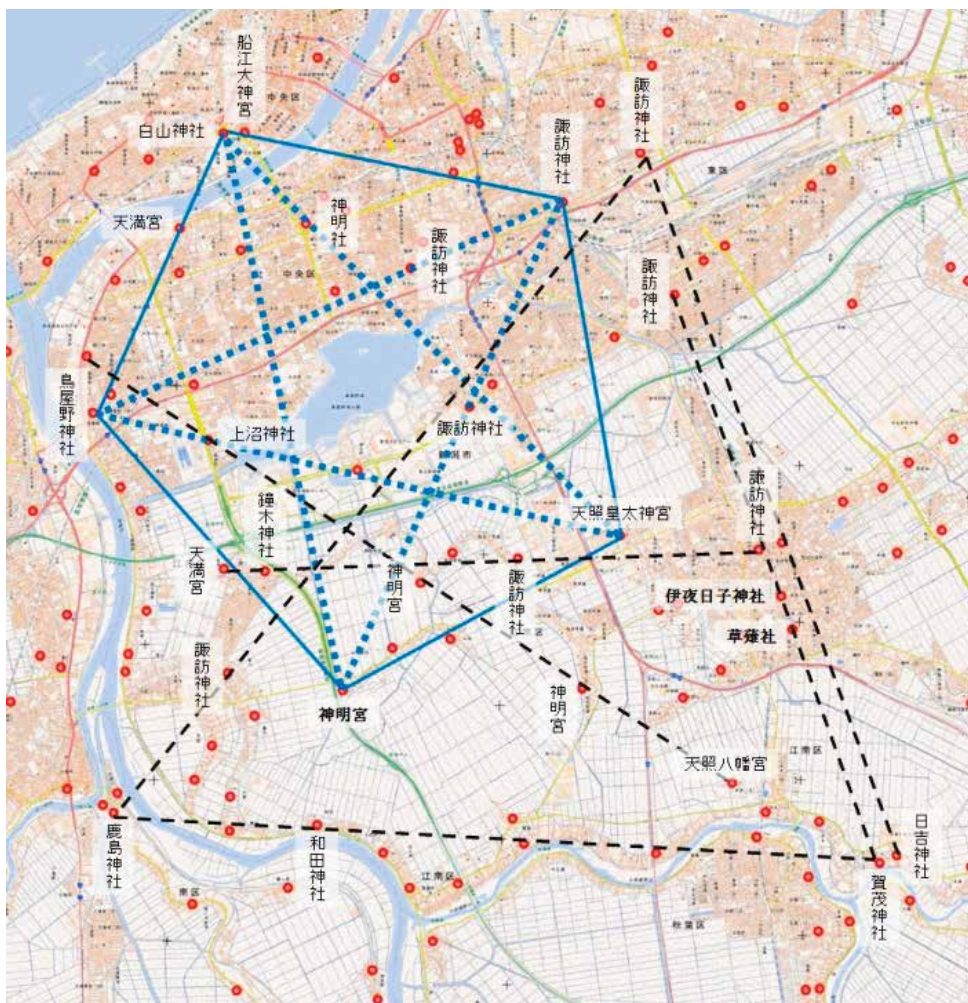


図 24. 鳥屋野潟周辺の山当て

### 4.3. 鳥屋野潟周辺の山当て

次に、鳥屋野潟とその周辺集落との関係性についても、福島潟同様に「山当て」の技法を用い筆者独自に解析したことを紹介したい。

前述のように須佐之男神社や三柱神社というような幾つもの直線が重なる神社は見受けられなかったものの、福島潟周辺の「山当て」とは違う図形が鳥屋野潟周辺で現れた。この図形は后背湿地が広がる中で砂堤に集落を形成した鳥屋野潟周辺の特徴である（鳥屋野潟周辺の「山当て」については図24.を参照）。

図24で最も目を引くのが何と言っても星形の図形である。この形は陰陽五行説にある「五芒星（ごぼうせい）」と呼ばれる図形である。この図形は西洋・東洋ともに魔除けとして利用されるものである。五芒星は龍神を鎮めるものとして使用されることもあり、龍神の特性である水害を鎮めるためである。

五芒星は、木・火・土・金・水の五行からなり、それぞれに相生（そうじょう）・相剋（そうこく）の関係がある（相生は木→火→土→金→水→木、相剋は木→土→水→火→金→木）。相生は、相手を生み出す陽の関係で、相剋は相手を打ち滅ぼす陰の関係である。

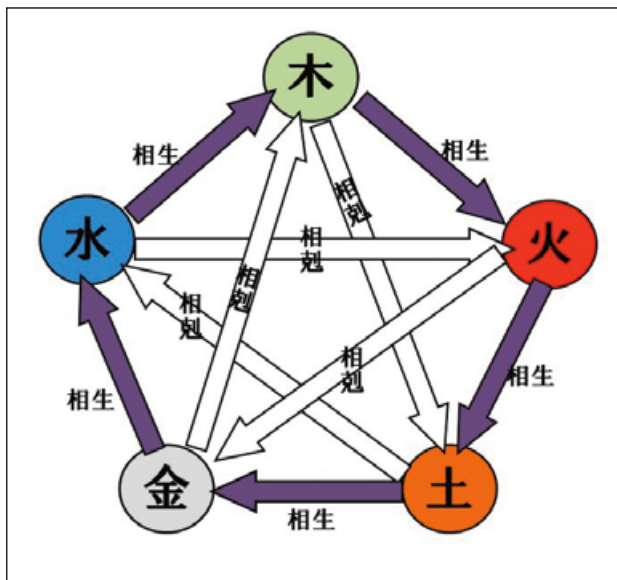


図 25. 五行思想

鳥屋野潟周辺の五芒星を形成する相生の関係を表すものと思われるものとしては以下の通りである。

相生

白山神社（白山公園内）→紫竹の諏訪神社→鶺鴒ノ子の天照大神宮→丸潟新田の神明宮→鳥屋野の鳥屋野神社→白山神社（白山公園内）。



図 26. 相生の関係にあると思われる神社

一方、相剋の関係結びつける直線としては以下のラインが挙げられる（図27.を参照）。

相剋

- ① 白山神社・堀之内の神明社・鶺鴒ノ子の天照大神宮
- ② 鳥屋野神社・上沼の上沼神社・鶺鴒ノ子の天照皇大神宮
- ③ 紫竹の諏訪神社・鏡の諏訪社・鳥屋野神社
- ④ 丸潟新田の神明宮・長潟の諏訪神社・紫竹の諏訪神社
- ⑤ 白山神社と丸潟新田の神明宮を結ぶライン



図 27. 相剋の関係にあると思われる神社

この①から⑤の直線を伝って相剋の関係にあると思わ

れる形として、白山神社→鶉ノ子の天照大神宮→鳥屋野神社→紫竹の諏訪神社→丸瀧新田の神明宮→白山神社である。

白山神社の主祭神は、菊理媛大神（きくりひめのおおかみ）で、そのほか伊邪那岐命（いざなぎのみこと）、伊邪那美命（いざなみのみこと）である。

菊理媛大神は、加賀国の白山を信仰する白山比咩神（しらやまひめのかみ）と同一とされる。菊理媛大神は、伊邪那岐命と伊邪那美命の口論の仲裁に入り仲直りさせたという神話から、縁結びの神とされた。

紫竹にある諏訪神社の祭神は、諏訪大明神（建御名方神、八坂刀売神）といわれている。

建御名方神（たけみなかた）は、大国主神（おおくにぬし）の御子神（みこがみ、子ども）であるとされている。建御名方神は、建御雷神（たけみかづち）に力比べを申し出たが、建御雷神には敵わず逆に科野国州羽海（信濃国諏訪湖）まで追い詰められ、殺されそうになった。そのため、建御名方神はその地（諏訪湖）から出ないことと、大国主・八重事代主神に背かないことなどを約束したという。

新潟県内に諏訪神社が多いのは、一説としては建御名方神の「みなかた＝水瀧（みなかた）」の意味を持つことから瀧周辺に多く配置されたということや、信濃国からの移住者が多かったなどの説があるが定かではない。

鶉ノ子にある天照皇太神宮（てんしょうこうたいじんぐう）の祭神は、天照大神（あまてらすおおみかみ）である。天照大神は、最も有名な神の一つで、父は伊邪那岐命（いざなぎのみこと）、母は伊邪那美命（いざなみのみこと）で、弟に月夜見尊（つくよみ）と素戔嗚（すさのお）がいる。天照大神は女性の神で、日本の自然を生んだ神、天岩戸の神隠れで有名で、太陽を神格化した神とされる。

神明宮も、新潟県内各地に多く存在している。神明宮の祭神も天照大神を主祭神とする。神明宮（神明社・神明神社）は伊勢神宮内宮を総本社とする。

県内各地に神明宮（神明社・神明神社）が多い理由の一つが、神仏習合の思想のもとで江戸時代に伊勢信仰（お伊勢参り）が盛んになると新田開発の際に創建することが盛んになったということが挙げられる。神明宮（神明神社）の建築様式は、神明造（しんめいづくり）といわれる独特のもので、鳥居も神明鳥居という様式とされている。

確かに、神明宮（神明社・神明神社）が存在する集落を見ると、ほとんどが新田開発によって形成された所であると分かる。これらの新田集落の大半は、徳川吉宗

によって全国各地に新田開発を奨励した享保7（1722）年以降の新田開発によって形成された集落である。瀧の周辺にある集落のほとんどで神明宮（神明社・神明神社）が建てられており、新田開発と同時に建立されている。

鳥屋野瀧は周辺集落にとって土取場として利用されるほか遊水池としても役立ち、江戸時代に埋め立て反対運動が行われるなど、重要な瀧として認識されていた。その遊水地としての役割を担う一方、洪水が鳥屋野瀧周辺集落で幾度と起こり悩まされていた。

ここでも、水害（龍神）とそれによって発生するツツガムシや蚊によって引き起こされる疫病を「山当て」によって鎮めようとしたものと思われる。特に、五芒星は魔除けとして強い効力を発揮するため、鎮めるために五芒星を配置したのではないかとと思われる。これは鳥屋野瀧の「山当て」の特徴といえる。

神明宮（神明社・神明神社）や諏訪神社は、越後平野に多く存在する二社であり、瀧周辺での新田開発と同時に建てられている。

これらの神社をその場所に建てた“意味”は、今回筆者独自の解析によると、「山当て」によって計画的に配置されたのではないかと考える。計画的に配置した理由は、瀧とその周辺の邪気を鎮め、吸収させることによって、災いから逃れることを図るためではないかと考える。

## 5. 佐瀧・上堰瀧周辺の山当て

佐瀧および上堰瀧とその周辺集落との関係を見るに、重要な視点として旧北陸道（旧北国街道）との関係も踏まえなければならない。これは、福島瀧や鳥屋野瀧とは違う視点であるが、旧北陸道（旧北国街道）を軸とした集落計画と「山当て」が密接な関係にあるからである。

佐瀧のすぐ南側には赤塚村、北側には山崎古新田村がある。上堰瀧のすぐ南側には布目村、北側には松野尾村・松山村がある。

そこを通る旧北陸道（旧北国街道）の道路計画は、すべて「山当て」によって決められていると考えて良い（図28.を参照）。

この「山当て」では、佐瀧・上堰瀧は洪水の心配が無いため、各瀧に対する“鎮め”は見当たらない。その一方で、乳の瀧（ちのがた）、文太郎瀧、田の尻瀧に対する“鎮め”は「山当て」から見受けられた。

この図28でも、福島瀧で見られるように三角形で乳の瀧（ちのがた）などの鎮めを行っている。ただ、福島瀧・鳥屋野瀧にはない図形として「鼓星（つづみばし）」が見受けられる。鼓星（カシオペア座の和名）もまた周辺集落の“鎮め”になっている。



旧北陸道（旧北国街道）の形状、桁形（屈曲）の全ての位置が「山当て」で決められていることが図28.からも良く分かるが、これも江戸時代に広く城下町や集落の整備計画で使われた方法と全く同じである。

図28.の中で、例えば佐潟の脇を通る街道部分（現在の県道2号線）の位置とその形状を導く直線は、御手洗瀉（みたらせがた）の北にある神明社（旧船江神社）・浄恩寺（西区赤塚）・神明宮（西区坂田）・諏訪社（西蒲区天竺堂）のそれぞれを結ぶ直線と重なる。

また、赤塚神社（西区赤塚）・諏訪神社（西蒲区布目）を結ぶ直線と、赤塚・松野尾間を結ぶ街道の直線の延長線上に山祇社（西区赤塚）がある。

図28.で見ると、これらの線の交点に街道の屈曲（桁形）が設けられていることが分かる。



図 29. 街道の屈曲部の「山当て」拡大（図 28. より抜粋）

図30は、赤線が絵図の比較によって分かった現在との位置関係と、青線が赤塚地域において旧街道だと言われてきた位置関係（実際は「背割り道」）である。

今まで、赤塚地域において、図30にあるように、旧北陸道（旧北国街道）は新砂丘Ⅱの南側を通っていたという説（通説）がいわれてきた。しかし、いくつかの絵図を比較してもその場所には街道は描かれていない。また、今回の「山当て」による解析を見ても、その場所とは合致しない。

どうしてその通説の道が旧北陸道（旧北国街道）であ

るといわれてきたのか。その発端をたどると、ある個人が自宅の前が街道だったという説を唱え、その個人宅の前の道路につながる関係にあると思われる部分を、現在の地図に落とし込んで線で結んだ所が旧街道であるという説となった。

しかし、残念ながら、この説の場所はどうみても集落形成で造られた「背割り道」としか見ることができず、また街道幅も平野部の主要街道であるにも関わらず3尺（約90cm）～1間（約182cm）と狭いことから、主要街道であるとはいえない。

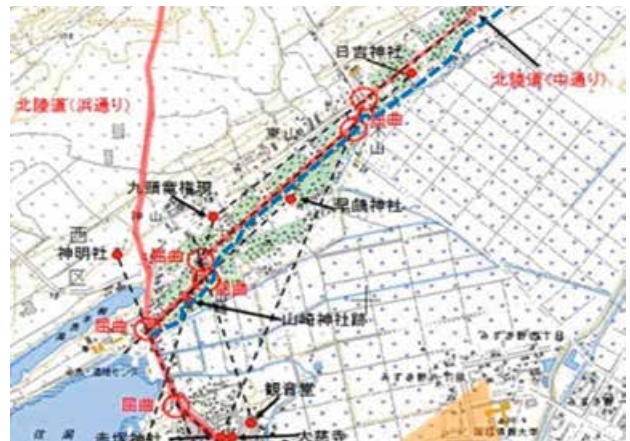


図 30. 地元の通説と実際の街道の位置関係

図30のうち、「浜通り」と記した部分は、御手洗瀉から四ツ郷屋浜村へと続く道で、江戸初期より江戸後期まで使われていた。しかし、その後砂丘地の掘削と耕地整理によってその面影は皆無となってしまった。耕地整理前には、この「浜通り」の高みに出羽三山碑が置かれていた。その碑は、赤塚の個人が引き取り、一時期は赤塚の五差路脇に置かれたものの、再移転して現在は別の空き地に置かれている。今後、この碑に対する対処（移転）も考えて行くことが必要である。

「背割り道」とは、住宅の裏にあった狭い路地（各家の裏側を結ぶ路地）のことであり、地図上には表示されないことが多い。昭和30～40年代までは「背割り道」が残され、通り抜けることができた。次第に住宅の新築に伴い、塀に囲まれることが多くなったことにより、「背割り道」が分断され消滅していった。この「背割り道」を境界として旧街道に面する敷地は宅地、反対側は畑地として分けられている（赤塚本村については図31.を参照）。

敷地を分けたのは、二宮尊徳から集落整備方法を学んだ中原藤蔵によって行なわれたものであるが、これらの詳細については、『平成26年度 新潟市潟環境研究所 研究成果報告書』に、赤塚の住宅構成として述べているため本稿では割愛する。<sup>16)</sup>

赤塚本村は、江戸初期から馬継（継馬、伝馬）である

宿場町であった。その後、江戸中期から在郷町として発展していく。現在の各家を見ると、間口が狭く奥に長細い形となっている。一見すると、町屋（まちや）にも見えるが、実際は背割り道によって宅地と畑地がはっきり分けられていることから、町屋ではない。それは、図31からも見てとれる。

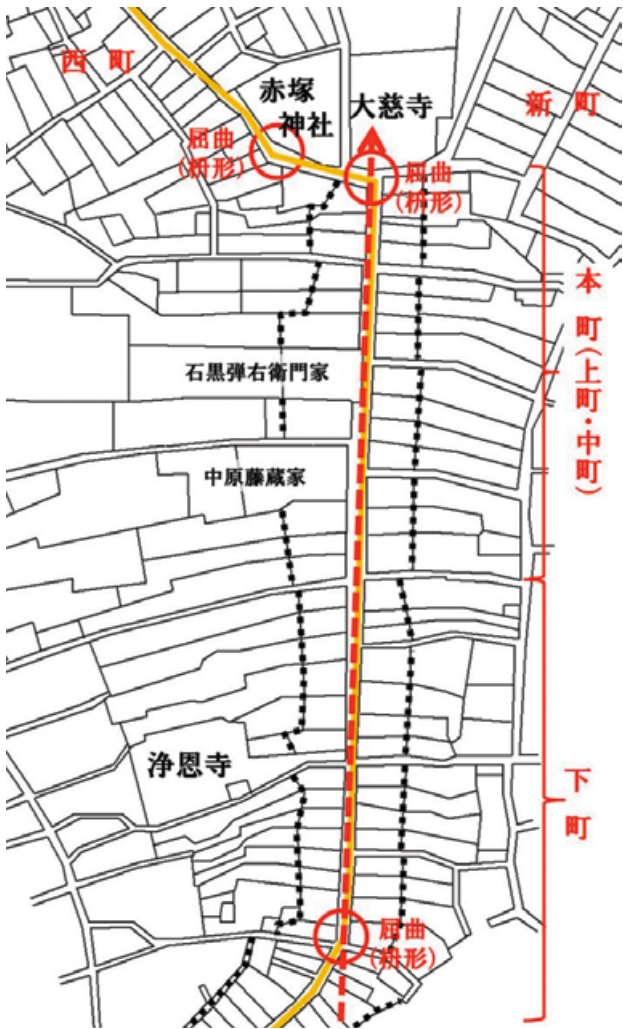


図 31. 赤塚集落の敷地構成と「背割り道」

図31は、赤塚本村部分の集落敷地構成の一部である。うち、黄色線は旧北陸道（旧北国街道）、赤色点線は「山当て」による磁北のライン、赤丸で囲んだ所は「山当て」によってその位置や形状が導かれた屈曲（枡形）、黒色点線が「背割り道」である。

磁北（じほく）とは、磁石で示される北方位をいう。北は、磁北のほか「真北（しんぼく、しんぼく）」がある。風水思想上では北を見る時に、この二種が扱われている。真北は、北極星の方向を示す。磁北と真北の偏角は7度である（真北に対して磁北が西側に7度ずれている）。

大慈寺（曹洞宗）は、山門中央と本堂中央を結ぶ直線

が真北である。そのため、図31の赤色点線である旧街道からは本堂は、右側にずれて見える（ずれている関係は図32を参照）。



図 32. 磁北と真北のずれ

佐潟北側、旧北陸道（旧北国街道）と角田道の分岐点には、天保10（1839）年に建てられた道標（みちしるべ）があった。その道標は五輪塔の形をしており、建立者は山崎村庄屋の伊藤家である。ちなみに、その伊藤家で有名な人物が、新川掘削工事の功労者である伊藤五郎左衛門であり、山崎村庄屋伊藤家の出身である。



図 33. 五輪塔の道標

この道標には「南妙法蓮華経」と刻まれている。五輪塔も五行を意味し、街道の角に交わる邪気を鎮めることに一役買っていた。現在、この五輪塔は別の場所に移され、その役割と道標の意味は失ってしまった。

6. おわりに

社寺の存在位置や道路の屈曲には意味があるということについて述べてきた。



筆者は、時々東京へ行くと必ずといって良いほど江戸城を散策する。歩き疲れた中、本丸跡にあるベンチに腰掛け休憩をするのだが、都会の中の緑と野鳥のさえずりに癒される。都内の公園には無い安心感があり、何故かリラックスできる。

良く考えてみれば、本稿で挙げた通り江戸城本丸全体が多くの方が集まる場であるパワースポットのためであり、この場所に本丸を設ける意味があるということである。それにふと気づかされ、筆者が良く利用するベンチ付近は、特に力が集まる「龍穴（りゅうけつ）」に位置していたことが後から分かった。

では、私たちが普段暮らす新潟市内には江戸城の本丸のようなパワースポットがあるのかどうかと思いを巡らすと、潟の存在が浮かび上がる。潟にいと安心感が込み上げてくる。水辺と周辺の木々、鳥のさえずり、風が通る音や風当りなどがリラックス効果を生んでくれる。

また、筆者が普段自家用車で新潟市内を走っていると、所々の主幹道路の一区間に「山当て」と似た風景を見かける。この区間を運転していると、実に爽快な気分になる。

本稿で紹介した「山当て」で注目した神社や潟、凶形全体などが正にパワースポットであるということである。

先人が潟との関わり方の一つとして、「山当て」によって災いを鎮め、安心した生活を営めるようにと願いを込めて集落を形成して行った歴史があってこそ、安心感や爽快な気分を貰えるのではないだろうか。

周辺集落との「山当て」関係にある範囲と歴史的過程を尊重して「潟」を見直し、今後の都市整備にも「山当て」を活かしていくことを提言したい。

また、年末年始に行われる「二年参り」と「初詣」は、一つの神社も良いが、本稿で紹介した「山当て」による力が集中する神社に詣でることや、あるいは潟自体へ詣でる「潟詣で（かたもうで）」も良いのではないかと考える。



図 34. 『越後平野と潟の屏風絵図』 潟遊人（筆者）作

#### 参考文献

- 1) 『風水 気の景観地理学』 渡邊錦雄著，1994年3月発行，渡辺睦久 刊，p.25

- 2) 『風水 気の景観地理学』 渡邊錦雄著，1994年3月発行，渡辺睦久 刊，p.29より模写
- 3) 『風水 気の景観地理学』 渡邊錦雄著，1994年3月発行，渡辺睦久 刊，p.29
- 4) 『全国・最強ご利益パワースポット巡り』，金谷俊一郎 著，宝島社 刊，2015年6月
- 5) 『早分かり！日本のパワースポット』 幸運社 著，大和書房 出版，2010年8月発行
- 6) 『「風水」で読み解く日本史の謎 - 平安京遷都から江戸幕府の繁栄まで』 PHP研究所 刊，2003年3月発行
- 7) 『海出人之図（越後国福嶋潟）』 国立歴史民俗博物館所蔵
- 8) 『海出人之図（越後国福嶋潟）』 国立歴史民俗博物館所蔵，模写
- 9) 『新潟市合併町村の歴史 第4巻』 昭和61年2月発行，新潟市 刊，p.570
- 10) 『新潟市合併町村の歴史 第4巻』 昭和61年2月発行，新潟市 刊，p.570
- 11) 『新潟市合併町村の歴史 第4巻』 昭和61年2月発行，新潟市 刊，p.570
- 12) 『新潟市合併町村の歴史 第4巻』 昭和61年2月発行，新潟市 刊，p.574
- 13) 『新潟市合併町村の歴史 第4巻』 昭和61年2月発行，新潟市 刊，p.569
- 14) 『新潟市合併町村の歴史 第4巻』 昭和61年2月発行，新潟市 刊，p.569
- 15) 『新潟市合併町村の歴史 第4巻』 昭和61年2月発行，新潟市 刊，p.569
- 16) 『平成26年度 新潟市潟環境研究所 研究成果報告書』 平成27年6月発行，新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局 刊，p.83